『敦煌寫本研究年報』第七號（2013.03）361-366 頁

敦煌吐魯番學からみた東アジア博物學

書評：余欣『中古異相――寫本時代的學術、信仰與社會』
上海古籍出版社、2011 年 3 月

岩本篤志

はじめに

敦煌文獻および吐魯番文獻を對象とした研究が「敦煌吐魯番學」という固有の一分野をなすとみなされるようになってから久しい。1983 年に甘肅省の蘭州で開催された中國敦煌吐魯番學會第一回大會を畫期と見なすとすれば、すでに 30 年近くがすぎたことになる。また敦煌文獻の發見にさかのぼれば一世紀が過ぎているが、近年ようやく俄藏敦煌文獻、日本所藏の敦煌文獻などが研究の俎上にあげられるようになったばかりで、加えて敦煌莫高窟北區の出土資料や新獲吐魯番出土文獻に關する新報告のように研究材料が年々增え續けている狀況にある。ただ、研究對象の擴大は、しばしば研究分野が細分化されていく傾向をもうみだす。しかし、細分化は必ずしも研究の高度化につながるものではないので、その結果を俯瞰する視點が別途、求められていくことになろう。

さて、本書の著者である余欣氏は、敦煌吐魯番學を專門とする中華人民共和國を代表する研究者の一人である。これまでの代表的著作に主に敦煌文獻をもちいた歷史宗教學的研究である『神道人心――唐宋之際敦煌民生宗教社會史研究』（中華書局、2006 年 3 月）があり、すでに世界的に知られた研究者である。かつて評者は書評を書かせていただいたことがある（『西北出土文獻研究』第 4 號、2007 年 3 月）。

本書はその著者による中國西北地域の出土文物を用いた知識社會史的研究であり、中國中世の「博物學」研究である。卷頭に本書の刊行に至るまでに資金援助を受けた費目および題名が記されており、そのいずれにも「博物學」という言葉が含まれることからも著者が本書のような形をめざして研究をつづけてきたことがうかがえる。

また本書には中國思想史・宗教史で著名な葛兆光氏による序文が寄せられており、そこに趣旨をうかがうことができるほか、上編に含まれる「要義」に著者自身による各章の概要が示されており、構成の意圖は鮮明である。したがって、評者があえて本書の紹介に贅言を要すものではないが、ほぼ同時代の近接した題材をあつかう研究者の一人として、また日本の研究環境から本書がどのように讀めたのか、批評してみることとしたい。

一、本書の概要と視角

本書は導論および本論上下二編から構成される。導論では解題、總論、要義にわけて、趣旨說明および分析手法が記され、本論は上下二編十章構成となっており、上編「寫本時代的學與術」に第一章から第五章、下編「中古博物的林中路」に第六章から第十章が含まれる。

「導論：同相と異相」では筆者の關心の所在が示される。敦煌吐魯番學および中外關係史を專門とする筆者は中國文化の本源ともいえる二つの相、すなわち方術と博物學に注目して新しい中國中古史（中世史）を開拓しようとしたことが記されている。

「解題」では、書名の意味が說明される。中古史としたのは魏晉南北朝隋唐史であり、異相とは佛典の語彙であり、相術（姿形から、その者の運勢をみる）が示す相のことでもあると述べる。また中國中古史における知識、信仰、社會の實相がいかなるものであったのかという問題を提起し、その一部である方術と博物學に著目することで中古時代の骨相をみいだすことを目的としたと述べている。また「寫本時代」とは知識の傳達に紙の寫本が用いられた時期、すなわち魏晉南北朝隋唐時期がそれにあたるとする。

そして寫本時代の典籍の書寫とその傳播の特徵を以下の五點にまとめる。第一に紙の寫本がその利用において簡牘時代の特徵の一部をとどめていること、第二に寫本で用いられている俗字や誤字などには知識社會史的觀點からみて有用なものを含んでいること、第三に寫本にしばしば見られる雜抄や摘錄のような形態がこの時期特有の撰述のありかたで、そこに筆者の願望や意圖があらわれていること、第四に寫本には書儀、願文、契約、社司轉帖等の實用文書が含まれており、宗教活動や知識傳承に不可欠な一級資料であること、第五に寫本中の題記、書寫形態、傳播の過程等の考察に貴重な示唆を與えることをあげる。これらは編纂史料である正史とは扱いが異なる寫本を史料として扱う際にどこに注目すべきかを示したものである。著者は師の榮新江の持論「文獻研究をこえて歷史研究へ」とい

う言葉に導かれ、それを具現化するために有效な研究環境に身をおくことをとおして現在の視座を獲得したと記している。

「總論」では方術と博物學が傳統社會の知識體系において重要な位置を占めることを『後漢書』方術傳、『山海經』、『博物志』、『異物志』等の漢文史料を用いながら論じ、「Natural History」の譯語として使われる「博物學」とは異なる「世界認識の思考方法」としての東アジア博物學からの觀點の有效性を述べる。著者がそのように述べる背景にはベルナルド・ラウファーやエドワード・H・シェーファーの東アジア中世博物學的な著作のほか、ウィトゲンシュタインの「論確實性」やハイデガーの「世界像の時代」等の認識論に裏付けられた世界觀が意識されていることが示される。そして著者は以上の觀點をふまえて、中國中世の方術と博物の源流を解釋していくと述べる。

「要義」ではその後に展開される本論の論點、要旨が記されている。したがってそこで著者自身による本書の要約を讀むことができるわけだが、まだ本書を手に取ったことの無い方のために、續いて私自身が關心を持った點とあわせて簡單に紹介しておくことにしたい。

二、本書の構成とその概要

まず本書は前述したように上下二篇にわかれている。「上編 寫本時代的學與術」から見ていこう。

第一章「史學習染：從《漢書》寫本看典籍傳承」は敦煌吐魯番『漢書』寫本を題材に、「歴史知識はどのようにして社會に浸透して大衆化したか」という觀點から、知識社會史的な分析が展開される。敦煌吐魯番文獻に關する文獻學的知見をふまえて個々の文獻を丁寧に分析しつつ、雜抄など識字書、童蒙書に關しても言及する。

第二章「物怪易占：闞氏高昌王國的卜筮與經學」は 5 世紀後半の闞氏高昌期の墓葬から出土した新獲吐魯番出土文獻のひとつ『易雜占』をはじめとした占術書を題材にした內容で、著者が得意とする分野である。睡虎地秦簡や正史五行志などとの比較をふまえ、文獻學的分析によって占術の方法や政權との關わりを解き明かしている。縱橫無盡かつ網羅的に先行研究が引用されているのは著者ならではのスタイルであるが、同時に先行研究に對して真摯に對峙している樣子をうかがうことができる。

第三章「厭劾妖祥：絲路遺物所見人形方術探賾」は敦煌、高臺、居延、吐魯番、長沙、ウラル山脈中部、奈良、京都といったユーラシア大陸の東部でしばしば出

土する「木俑」すなわち「人形」を題材に、その用途や意圖をさぐったものである。このうち、とくに中國西北地域で發見されたものについては、先行の研究者がそうした人形の出土地が軍事施設の長城烽燧付近であることに注目していないことを指摘し、それが兵陰陽に關係するものであることを論じ、また各地域の文物にこめられた意圖を比較していくことで、闢邪思想でつながる東西文化の交流を見いだしている。

第四章「觀風望氣：吐魯番文書殘存占候之術鉤沉」はドイツ所藏吐魯番出土文獻を中心にしたものである。著者が記しているようにドイツ所藏の吐魯番出土方術文獻はいまだ十分な研究がなされていない。著者は殷代以來の占術史の流れをふまえて、そのドイツ所藏の吐魯番出土文獻 Ch.3316 が占風術について記した文獻の斷片であることを見いだし、この資料がもつ出土地ならではの特徴と書寫年代を分析し、中國學のなかに位置づける。やはり睡虎地秦簡『日書』や敦煌占術文獻をはじめとした出土資料のほか、既知の傳存資料が多數援用されている。また西夏占術文獻にまで觸れているのは筆者の視野の廣さを示すものであって、それは次章にもあきらかである。

第五章「選擇推步：黑水城文獻子餘日者之術溯源」は俄藏黑水城文獻のうち、入宅や出行等のイベントの「(吉）日を選ぶ」や選擇術の文獻を扱ったものである。その分析には他章と同樣に敦煌・吐魯番占術文獻のほか、關連の深い具注歷日や歲時記類の知見が活かされている。著者は西夏語文獻を直に分析しているわけではなく漢語譯を援用しているが、西夏語の占術文獻はこれまでほとんど未開拓の分野であって、本章の分析手法は今後の研究に重要な一步を踏み出したものといえる。

次に「下編 中古博物的林中路」を見ていこう。上編が主に「知識」を扱っていたのに對し、後編は題名どおり、主に博物學的な「モノ」を扱っている。

第六章「附子考：藥物的東西交通史」はその題名通り、中醫藥（日本語では漢方藥）や毒としても用いられるトリカブトの部位ごとの藥材名の變遷とその原產地を東西交涉史の中において論じたものである。なぜ附子に注目したのか、それはラウファーが『シノ・イラニカ』で『隋書』に附子がササン朝ペルシアの產品であると記されていることを指摘しつつも、實際それがペルシアにあった話は聞かないというすっきりしない記述をしていることに著目したことによる。著者は多數の史書と出土資料を博搜し、その原產地が中國にあったこと、それにもかかわらずなぜペルシア由來のものとする記述があったかを推論している。附子に關する專門的な研究書は日本でも中國でもかなりの數が公刊されているが、著者はそれらを博搜の上で論を展開する。

第七章「蕪菁考：菜茹的風華博物志」は蕪菁の中國社會史的、東西交渉史等における意義を論じたものである。原產地に關する學說の整理から書き起こし、蕪菁をめぐる史料をあげながら食物史、本草學、宗教史、東西交渉史へ展開し、蕪菁が日本をふくむ東アジアにどのように廣まり定著していったのかを分析する。まさに「博物學」的敘述となっている。

第八章「七寶考：佛寺寶藏的功能詮釋」は寺院の什物すなわち秘藏品の存在意義とそれが東西文化交流の中でどのようにもたらされ、定著したのかを論じたものである。ここでも敦煌文獻が主要史料として用いられる。そもそも敦煌文獻は寺が所有する一角（藏經洞）から發見されたものであり、そこには主に寺院が使用していた什物が納められていたと見られている。本章でもラウファーとシェーファーの指摘に導かれながらも、彼らが使用し得なかった出土資料や新知見を多數用いて、論が展開される。

第九章「土貢考：沙州貢品的歷史情境」は地方から中央へ特產品が貢納される「土貢」に注目し、敦煌文獻によってその實態を探ったものである。敦煌の土貢についてはこれまでもそれに關係する個々の敦煌文獻が分析される過程で觸れられてはきたが、本章のような形で先行研究と關係史料を網羅的に檢討した研究は管見の限りこれまでなかった。

第十章「異物考：龜茲方物的文化想象」は東西文化交渉の中に位置する龜茲に關係する文物を扱った論考である。出土文物の報告をふまえながら、宗教儀式等に用いられる金銀器や西アジアもしくはヨーロッパ的な意匠をもつ五種の文物について概觀した後、「異域の風景」がどのようにして記錄の中に投影されていったのか、中國中世の人々の世界像をなりたたせているその構造の一端を解き明かしている。

以上のように各章の概要を私なりにまとめた。敦煌・吐魯番文獻の研究を礎にその全體を博物學または知識社會史的に統括するという敘述スタイルは敦煌吐魯番學のみならずアジア研究を見通す新たな視點といえよう。

おわりに——感想にかえて

本書はしばしば引用されるラウファーやシェーファーの衣鉢を繼ぐ博物學的大作であると同時に、個々の敦煌吐魯番文獻においてもそれぞれの史資料を用いた新しい研究を切り開いたものといえる。ひとつひとつの論考を見ていくと、敦煌・吐魯番文獻を用いる際には、根拠に基づいてその書寫年代と用いられた場所の推定をしており、從來の文獻學的研究の肝要な點ははずしていない。このことは本

書にしばしば出てくる榮新江教授が述べていたという「文獻研究を越えた歴史研究を」という教えをその獨創力のもとに遂行した結果といえよう。 またいささかペダンチックにみえる先行研究への言及は個々の論題を分析するのには必要不可欠な引用であり、その博捜ぶりとそれにもとづく分析は多くの讀者に新しい情報を提供し、啓發するところが多い。また中文書籍によくみられる日本語表記の誤りがほとんどみられないことにも著者の緻密さをうかがうことができる。

今回、評者が本書をとりあげたのは書評執筆の打診をいただいたためでもあったが、その內容が評者の志向とも幾分重なっていると感じたことが大きな動機ともなった。もちろん中國人である筆者と日本人である評者とでは研究環境や兩國の出版狀況は異なっている。しかし、評者が學生の頃に讀んだ博物學的エンターテイメントやニュー・アカデミズムに分類される著書、またそれらに引用される國內外の著書は、著者が導論で引用した文獻とほとんど重複しており、結果として本書の視角には共感できるところが多かった。その意味ではその共感には同時代の研究者としての必然も含まれているのではあろう。

ただ、とくに強調しておきたいのは、著者が本編において異分野の理論や言葉を性急に利用せず、個々の史料の分析、比較から地道に結論を導き出していることである。つまり筆者は史料をどう讀むか、史料から何を導き出せるのかを探求しているのであって、歐米の新史學の理論や潮流に乘ろうとしているわけではない。そういう意味で本書の魅力はこれまで積み重ねられてきた敦煌吐魯番學の研究を、また歴史學的な文獻讀解法を、これからの中國學またはアジア研究においてどう活かしていくかをみせてくれた點にあるのだと思う。

なお本稿は中文學術雜誌『中國中古史研究』から依頼をうけ、執筆投稿した書評の原稿を一部、加筆修正したものである。本稿によってより多くの研究者に本書の存在を知ってもらえれば幸いである。

（評者は立正大學文學部專任講師）